

【論 文】

バイリンガリズムの全体論的視点から見た 中・朝・日三言語話者の言語使用と意識

—— 比喩生成課題を用いたインタビュー調査 ——

房 賢 嬉・野々口 ちとせ

要約

本研究は、バイリンガリズムの全体論的視点から、日本の大学院で学ぶ中国朝鮮族留学生を持つ複数の言語が生活においてどのように機能しているかを探った。具体的にはまず、三言語使用者自身のイメージはどのようなものかを明らかにし、次に、そのイメージがどのような言語使用経験によって構築されたかを記述した。結果、中国語を使う自分はお母さんと例えられ、その理由は「ホスト社会における中国語の万能性」に、朝鮮語を使う自分はおばあさんと例えられ、その理由は「朝鮮語での感情表現と家族伝統性」に、日本語を使う自分はお父さんと例えられ、その理由は「日本語での実力証明」に、三カ国語を使う自分はおじいさんと例えられ、その理由は「高い権威」や「自尊心」にあった。また、この留学生の語りから、「公的言語としての中国語」と「私的言語としての朝鮮語」と「経済的な利益につながる日本語」を相補的に使用している様相が浮かび上がった。

目次

- I. 問題の所在：当事者による複言語使用の評価
 - II. 先行研究：中国朝鮮族と複言語使用に関する議論
 - III. 研究目的と課題
 - IV. 研究方法
 - V. 分析結果
 - 5.1 三言語を使用する自身のイメージはどのようなものか
 - 5.2 ストーリーライン
 - 5.3 理論記述
 - VI. 考察
 - 6.1 相補性の原理
 - 6.2 言語能力の再編成
 - VII. まとめ
- 参考文献

I. 問題の所在：当事者による複言語使用の評価

人の福祉として言語の福祉を考えるウェルフェア・リングイステイクスという分野がある（徳川 1999, 岡崎 2005a）。ウェルフェア・リングイステイクスでは、例えば留学生の福祉状

況を、彼らの言語の福祉状況から見ていくことになる。留学生のほとんどが、現地語のほか母語や英語など複数の言語を用いる複言語話者であることを踏まえると、留学生の言語の福祉状況は彼らの持つ複数の言語の福祉状況を指すことになる。また、言語の福祉状況は、言語の福祉的自由度である（岡崎 2005a: 11）という。言語の福祉的自由度とは、「自己が社会的に実現される」と判断される実行可能な言語の機能群が実現できると当事者が考える自由の範囲、度合いを示す。よって、留学生の言語の福祉状況は、彼らの持つ複数の言語の福祉的自由度として、当事者の言語意識や当事者による言語使用状況の把握を通して、評価することができると考えられる。重要なのは、言語の機能を当事者の生活・生きることと切り離さずに評価することであり、だからこそ当事者による評価が有用となるのである。

本研究では、複言語使用者として中国語・朝鮮語・日本語の三言語話者である中国朝鮮族留学生に注目する。中国朝鮮族留学生の持つ三言語の福祉状況の評価として、彼らの言語使用と意識を当事者の視点から明らかにしていく。

II. 先行研究：中国朝鮮族と複言語使用に関する議論

中国東北部に集住する朝鮮族の多くは、多数派言語の中国語と、継承語としての朝鮮語が使える二言語話者である。加えて、中国東北部の歴史的経緯や朝鮮語との言語的距離の近さから、中等教育で始まる外国語学習に日本語を選択する人が多く、中国朝鮮族には中・朝・日の三言語話者も少なくない（本田 2016）。鄭（2011）では、ライフヒストリー法におけるナラティブインタビューを用いて、中国朝鮮族日本語学習者 3 名が「母語」である朝鮮語と「母国語」である中国語と「外国語」の日本語という三「言語の境界」を生きる者として描かれている。しかし、境界を生きるとはどういうことなのだろうか。境界で分けられた言語世界を行き来するということだろうか。

バイリンガル研究では、複言語話者の言語は区切られた各言語の総和ではなく、分離できない一体のものとして考えられている（グロジャン 2018）。この全体論的視点から見ると、バイリンガルやトライリンガルといった複言語話者の能力は、各言語のモノリンガル話者との比較で測るべきではなく、実際、バイリンガル研究では複数の言語の使用実態が注目されている。複言語話者における複数の言語は場面によって使い分けられることが多く、それぞれの言語が相補的に使用される。これを相補性の原理と呼ぶ（グロジャン 2018: 29-30）。

図 1 はあるトライリンガルの人における相補性の原理を表したものである。言語 La, Lb, Lc の使用領域はそれぞれ四角形で示されている。図 1 の場合、主に La のみが使われる領域が七つあり、主に Lb が使われる領域は三つある。四つの領域では La と Lb の二言語が使われ、La・Lb・Lc 三言語が使われる領域が一つある。このような図は「どんなバイリンガル

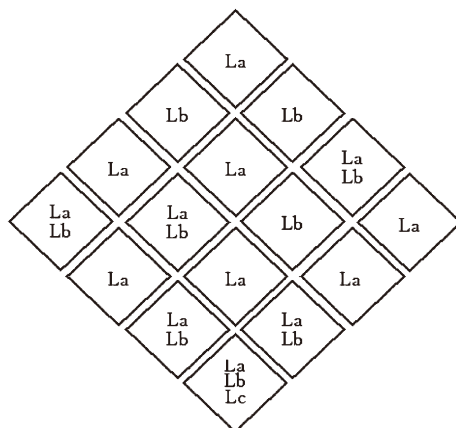


図1 あるトライリンガルの人における相補性の原理の図（グロジャン 2018：30）

の人についても構築することができるもので、その図はそれぞれ固有の配置」を持つという（グロジャン 2018：30）。

では、中国朝鮮族の複言語使用の実態はどのようなものだろうか。延辺朝鮮族に中・朝二言語使用に関するアンケート調査を実施した朴（2013）によると、朝鮮族は中国語と朝鮮語を、高位変種と低位変種として明確に使い分けているのではなく、必要に応じて使い分けていると考えられている。日本語を加えた中・朝・日の三言語使用については、高・村岡（2009）による言語選択およびコードスイッチングの観点からの調査がある。この調査では、朝鮮族同士のネットワークでのコードスイッチングは機能的であったが、日本に在住する中国漢民族とのネットワークや韓国人とのネットワーク、日本人とのネットワークにおいては、コードスイッチングに対する逸脱がはっきりと留意され、言語管理の対象となっていることが明らかにされた。このコードスイッチングに対する留意と言語管理は、彼らがそれぞれのコミュニケーション場面をどのように認知するかによると高・村岡（2009）は述べている。

そもそもバイリンガルの言語使用には、言語の能力や熟達度だけでなく言語意識が深く関わっている（小泉 2012）。小泉（2012）は、日・英バイリンガルの大学生を調査し、英語は利便性と実用性を兼ね備えた実用的・道具的側面を持つ言語、日本語は日本の家族に対する感情や言語そのものに対する深い愛着など情意的・統合的側面を持つ言語として、二言語が使い分けられている実態を当事者の語りから明らかにしている。

言語的活力理論においても、集団のメンバーが集団的行動のあり方を決める際、その言語が社会的にどのような状態にあると判断し、評価するかという主観的活力が、客観的活力と同等の影響を持つとされている（Giles, Bourhis, & Taylor 1977, 岡崎 2005b）。

では、朝鮮族の中・朝・日三言語話者は、自らの持つ三つの言語に対し、どのような意識

を持って使用しているのだろうか。

III. 研究目的と課題

本研究は、バイリンガリズムの全体論的視点から、中国朝鮮族が持つ複数の言語が彼らの生活においてどのように機能しているかを当事者の視点から明らかにする。具体的には、日本の大学院で学ぶ中国朝鮮族留学生を対象に、以下の研究課題を設定した。

課題 1) 三言語を使用する自身のイメージはどのようなものか

課題 2) そのイメージは、どのような言語使用経験によって構築されたか

IV. 研究方法

本研究の対象者はチャン（仮名）1名である。チャンは、中国のある大学に日本語教員として在籍しながら日本の大学院博士後期課程で学ぶ中国朝鮮族の留学生である。中国東北部で朝鮮族の両親のもとに生まれ、朝鮮族の夫と結婚、中国では姑と同居し、インタビュー当時、一人娘はカナダに留学中であった。

本研究では比喩生成課題とインタビュー調査を行い、インタビューの分析に SCAT (Steps for Cording and Theorization 大谷 2019) を用いた。比喩生成課題は高度に抽象的あるいは複雑な個人の認識や価値観を調査する方法の一つである (清水 2007)。チャンには比喩生成課題として、中国語・朝鮮語・日本語・三カ国語それぞれについて「○○語を話す私は…である。なぜなら…」の各文を完成してもらい、それらの文に関して約 1 時間半のインタビューを実施した。比喩生成課題におけるチャンの使用言語は中国語で、インタビューでは朝鮮語と日本語であった。

インタビューはチャンの許可を得た上で録音し、文字化して、そのテキストを SCAT (大谷 2019) の手法でコード化し、理論記述を行った。質的研究法の一つである SCAT は、4 段階のステップを踏んで概念を生成し理論記述を行う方法で、小規模のデータの解析に有効とされている。インタビュー・データのテキストを内容ごとにセグメント化し、第 1 段階でテキスト中の注目すべき語句を抽出、第 2 段階でテキスト中の語句を言い換え、第 3 段階で先行研究を参照しながら第 2 段階までの語句を説明するようなテキスト外の内容を記述し、第 4 段階で全体の文脈を考慮しつつテーマ・構成概念を抽出した。そして、テーマ・構成概念をすべて使ってストーリーラインを記述し、理論を構築した。SCAT による分析後、朝鮮語と韓国語の使い分けについて確認するために、チャンにフォローアップ・インタビューを行った。

V. 分析結果

5.1 三言語を使用する自身のイメージはどのようなものか

中朝日を使用するチャンのイメージを表1に示す。

表1 三言語を使用する自身のイメージ

言語	比喩生成課題（インタビューから抜粋）
中国語を使用する私	中国語を使う私は母、のようです。その理由は、どこでもいつでも誰ともどんなことも処理することができますから。お母さんは何でもできます。
朝鮮語を使用する私	朝鮮語を使う私はおばあさんみたい。（中略）朝鮮語はいつもなんですか、小学校のときの友達、クラスメートとか、中学校、高校のときのクラスメートと朝鮮語でしゃべってますし、家庭の中ではしゅうとめとか、おじいちゃん、おばあちゃん、なにか朝鮮語でしゃべってますから、親切で使うおばあさんみたい。
日本語を使用する私	日本語を使う私はお父さんみたい。これは適切かどうかわからないんですけど、理由としてはちょっと品がある（笑）。権威もある。私は日本語を使うとしたらいつも教壇に立って学生の前で日本語を使ってるじゃないですか。だから、そういう自分の実力を証明するときに日本語を使ってますから、そう、このようにお父さんに例えましたけど。
三ヶ国語を使用する私	三ヶ国語ができる私はおじいさんのようです。これは、おじいさんは家庭の中で一番権威が高い人だし、誰にもなんか尊敬される、されます。それで三ヶ国語できて他の人に羨ましがられるんじゃないですか、それでなんかおじいさんに例えましたけど。

SCATを用いて分析するに当たり、チャンのインタビューを369のテキストに分割し、今回はチャンの発話のみを分析対象とした。三言語を使用するチャン自身のイメージとその背後にある言語使用経験を抽出するために、言語使用ごとにストーリーラインを作成した。ストーリーラインは、SCATの分析フォーム<4>のテーマ・構成概念をすべて用いて作成し、その妥当性を担保した。[]の中の下線が引かれた箇所がテーマ・構成概念として抽出したコードである。

5.2 ストーリーライン

(1) 「中国語を使うチャン」のストーリーライン

中国語を使うチャンはお母さんのようだとして例えられた。その理由は「ホスト社会における中国語の万能性」にある。生活の基盤がある中国で「居心地のよさ」を感じており、生活する上での「中国語の利便性」を実感している。「中国在住の友人」が多く、「使う時間が長い中国語」であるが、「中国語による不便さ」を感じることもあり、チャンは「家庭内での中朝二言語併用」を行っている。「バイリンガルのメリット」を認めつつも、「二言語併用の否定的な面」として「両言語への不完全意識」を抱いており、自身の「中国語能力に対する低い評価」をしている。特に、「中国語で書くことに対する苦手意識」を持っているが、この

表 2 SCAT によるインタビューの分析 (一部抜粋)

番号	発話者	テキスト	<1> テキスト中の注目すべき語句	<2> テキスト中の語句の言い換え	<3> 左を説明するようなテキスト外の概念	<4> テーマ・構成概念
182	チャン	はい。私は中国人の友達が多いから、中国語で話すときが多いですね。だけど、韓国語(で打つのに)は熟練していないから(慣れていないから)。だから、速く打てないから、いつも打つのが遅いから、私は中国語で話しても大丈夫だから中国語で話します。でも相手は韓国語です。友達の半分は韓国にいるから…。	韓国語は速く打てないから、私は中国語で話します。でも相手は韓国語です。友達の半分は韓国にいるから。	韓国語は打つのが苦手なので、私は中国語で話します。でも相手は韓国語。友達の半分は韓国にいる。	民族教育。マルチ・モーダル。在韓中国朝鮮族。ディアスポラ。	マルチ・モーダルな中韓二言語併用/translanguaging.
183	聞き手	あ、韓国にいますね…。				
184	チャン	はい。小学校の友達と中学校の友達の半分は韓国にいます。それで同窓会は中国でもやるけど韓国でもやるんです。	小学校の友達と中学校の友達の半分は韓国にいます。同窓会は中国でも韓国でもやる。	同窓会は中韓で。	民族性。在韓中国朝鮮族。ディアスポラ。	韓国在住の友人。
185	聞き手	へえ、面白そうですね。				
186	チャン	はい。だから韓国と関係がないと言えば、ウソになります。	だから韓国と関係がないと言えばウソになります。	韓国と関係がある。	民族性。エスニック・アイデンティティ。ディアスポラ。	韓国との関係。
187	聞き手	そうなんだ…。では、さっき「中国語を話すときの自分はお母さん」とおっしゃいましたが、少し詳しく話していただけませんか。				
188	チャン	私は中国にいるから、今は中国人の友達の方が多いです。友達というより、働いているから職場にはみんな中国人だから。そして隣人もみんな中国人だし。だから中国語を使うときの方が多いです。ですから、中国語は自分のことはすべて自分で解決できる。そんな感覚ですね。で、お母さんのように何でもできるし、何でも解決できるという、そんな感覚です。	職場はみんな中国人。隣人もみんな中国人。だから中国語を使うときの方が多。中国語は自分のことはすべて自分で解決できる。お母さんのように何でもできるし、何でも解決できるという感覚。	まわりはみんな中国人だから、中国語はすべてのことが解決できる言語。万能。	居住地は中国。ホスト社会の言語。社会上昇。	中国在住の友人/ホスト社会における中国語の万能性。
189	聞き手	ご主人とは…。				
190	チャン	中国語で話すときもあるし、韓国語で話すときもあるし。だけど、旦那さんと中国語だけで話して、韓国語は使わなくて言われたら、それもちょっと不便(心地悪い)です。	旦那さんと中国語だけで話して、韓国語は使わなくて言われたら、それもちょっと不便(心地悪い)。	家庭内で中国語だけになるのは不自由。	言語感覚。言語意識。	夫との中韓二言語併用/中国語による不便さ/translanguaging.

ように「中国語能力の不足」を実感するようになったきっかけは、「大学進学」だという。これは、(朝鮮族学校と中国の一般学校の)「教育内容の差が生み出す言語能力の差」を表しており、チャンが「子どもの教育」を考える際に苦慮の末、「中国語の選択」に落ち着いた一つの原因になっている。

(2) 「朝鮮語を使うチャン」のストーリーライン

朝鮮語を使うチャンはおばあさんのようだと例えられた。その理由は「朝鮮語での感情表現と家族伝統性」にある。「継承語としての朝鮮語教育」を受けたチャンは、「身近な人との言語としての朝鮮語」が「仲間内で通用する言葉」であり、「朝鮮語は親切な感じ」の言語と考えている。チャンは「中国語が家庭内言語」であったにもかかわらず、「戦略的な就学前民族語教育」を受け、「朝鮮語の自然習得」に成功する。その結果、チャンは「家庭外で自然習得した朝鮮語」を自由に駆使するようになった。このような「子どものころの朝鮮語学習」は「母語としての朝鮮語学習」として認識されており、幼少期に形成された言語感覚はチャンに両言語についての意識を働かせ、「中国語と朝鮮語の言語感覚の違い」を認識できるようにした。このような言語感覚には「個人差」があり、「夫と同じ教育歴」を持つに

もかわらず、「夫との言語感覚の違い」が見られる。また、「朝鮮族の中の地域差」や「出身地による文化差」も存在するとチャンは考えている。チャンは朝鮮語を通して「韓国との関係」や「韓国への望郷感」や「朝鮮語への愛着」を感じ、「韓国訪問時の高揚感」を抱いたが、「自分の朝鮮語と韓国人の朝鮮語との違い」により韓国人から「エスニックアイデンティティの侵害」を受け、「韓国人への失望」が起こったり、「民族的連帯感の弱化」や「エスニックアイデンティティの揺らぎ」が出たりする。

(3) 「中朝二言語併用するチャン」のストーリーライン

チャンの二言語併用は「公的言語としての中国語」と「私的言語としての朝鮮語」に大きく分けられる。まず、「私的言語としての朝鮮語」は、「礼儀正しさを表現するための言語」として小学校の先生や姑のような「目上の人との会話を担当」する。また、「仲間内の会話」も担当しており、朝鮮族学校時代のクラスメートに会う際に用いられている。このように、チャンの「中朝二言語併用」には、「言語文化的要因によるトランスランゲージング」が見られる。「幼少期の友人関係」に対する「ポジティブ・ポライトネスとしての朝鮮語」と、姑に対する「ネガティブ・ポライトネスとしての朝鮮語」を使い分けている。職場では「公的言語としての中国語」が使われており、主に「話し言葉として機能する朝鮮語」とは違って、「書く場面」においては「中国語の無意識的な選択」が行われている。「朝鮮語で書くのは固有名詞程度」で、「頼まれたときのみ」に限定されており、書く技能において「能動的な中国語使用」と「受動的な朝鮮語使用」の様相が見受けられる。これは「書く場面における朝鮮語使用頻度の低下」によるものである。一方、家庭内やコミュニティ内では「公的言語としての中国語」と「私的言語としての朝鮮語」の分け方は通用せず、「複雑な二言語併用」を見せている。「中国語しか話さない娘」のために、主に中国語で会話が行われているが、上述のようにチャンと「姑との会話」においてのみ、朝鮮語が用いられている。また、「夫との中朝二言語併用」のほか、「韓国在住の友人」とのチャットでは「マルチ・モーダルな中朝二言語併用」も行われる。複数の言語能力は、「ある言語をたくさんしゃべるとその言語が少し上手になる感じ」であり、「使用頻度に応じた熟達度」をチャンは感じている。チャンは「家庭内韓国文化」を保ちつつ、「中国朝鮮族としてのアイデンティティ」を持ち、「娘に対する戦略的な民族語教育」のために朝鮮族学校に入学させ、「朝鮮族としてのアイデンティティ」の継承を図ろうとした。「漢族と朝鮮族の性役割観の違い」について、娘の世代とは「世代間の感覚差」があるとチャンは感じており、娘には朝鮮族との結婚には拘らず、「トランスナショナルな活躍への希望」を持っている。

(4) 「日本語を使うチャン」のストーリーライン

日本語を使うチャンはお父さんに例えられた。その理由は「日本語での実力証明」にある。

日本語は「学生の前で使う特権的な言語」であり、「日本語ネイティブ教師と会話するときに使う言語」だからである。「使う場面が限定される言語」ゆえに希少価値が生まれ、「権威ある言語」という認識が生まれている。また、日本語は「使用時に緊張感を伴う言語」でもあり、チャンにとっては「あくまでも外国語」である。外国語としては「学びやすい言語」で、「授業場面では朝鮮語より楽な言語」でもある。それは、「大学時代」から「学習を媒介する言語が中国語へスイッチ」したことと関係がある。「中国人に文法を教えるための媒介語」を「漢族の言葉で獲得」すると同時に、「文法を説明するための朝鮮語の喪失」が進んでいる。「仕事としての日本語」は日本留学において中国人留学生向けの宿舎にいたため「日本でも使う機会が少ない日本語」となっている。

(5) 「三ヶ国語を使うチャン」のストーリーライン

三ヶ国語を使うチャンはおじいさんに例えられた。その理由は「高い権威」や「自尊心」、「三ヶ国語を使えることに対する自己効力感」にある。チャンは「ビジネス場面で三言語話者として活躍」した経験を持ち、普段、私的な場面でしか使われなかった朝鮮語が「公的使用による経済的利益」を生み出したのである。しかしそのような経験は「一過性」のもので、現在チャンにとって朝鮮語は「経済的利益につながらない言語」として位置づけられている。むしろ、「経済的な利益につながる日本語」で生計を立てている。しかしながら、「経済的利益とは関係ない朝鮮語への愛着」はまだ残っており、それは「幼少期に形成した愛着」であると捉えている。「当事者だからうまく表現できない感覚」ではあるが、「朝鮮語は故郷のようなもの」で、「理屈では説明できない韓国への思い」がその根底にある。「他国に対する気持ちと異なる気持ち」を持たせたのは、「幼少期に接した言語や文化的な知識の豊富さ」であり、「幼少期の文化の受け入れによる影響」が大きかったと言える。また、中学から学習した日本語や日本文化の知識は、「日本に対する特別な気持ち」を持つことにつながっている。

5.3 理論記述

三言語を使用するチャン自身のイメージはどのような言語使用経験によって構築されたかを検討するために、それぞれの言語をチャンがどのように捉えているかをまず理解する必要がある。そこで、上述した(1)～(5)のストーリーラインをもとに、複言語話者であるチャンがそれぞれのことばをどのように捉えているかに焦点を当て、理論記述を行う。

(1) チャンにとっての中国語

中国語は使う時間が長い言語である。中国語は公的領域のみならず、私的領域においても話し言葉や書き言葉として機能する。こうしたホスト社会における中国語の万能性は、中国語使用時に「居心地のよさ」を持たせる。その経験は、子どもの教育にも影響を与え、子ど

もの第一言語として中国語の選択を動機づける。中国朝鮮族のバイリンガルにとって中国語は「利便性」と「不便さ」を併せ持つため、家庭内での中朝二言語併用を促す。

(2) チャンにとっての朝鮮語

朝鮮語は主に私的領域で機能し、話し言葉として用いられる。朝鮮語は、感情表現と家族伝統性を表す言語であり、礼儀正しさを表現するための言語である。身近な人との間で用いられ、聞き手を配慮するための言語である。経済的利益につながらないが、愛着のある言語である。これは幼少期の経験と結びついている可能性がある。

(3) チャンにとっての日本語

日本語は学びやすい外国語である。外国語であるため、使う場面が限定されており、言語使用時に緊張を伴う。言語を使う機会は少ないが、仕事をするときに用いられるので、日本語使用は実力の証明になる。そのため、特権的な言語になり得る。

(4) チャンにとっての三ヶ国語

三ヶ国語を駆使することにより、高い権威を有し、自己効力感や自尊心を持たせる。

それぞれのことばを使うチャン自身のイメージと、その背後にあることばの捉え方を図にしたものが図2である。

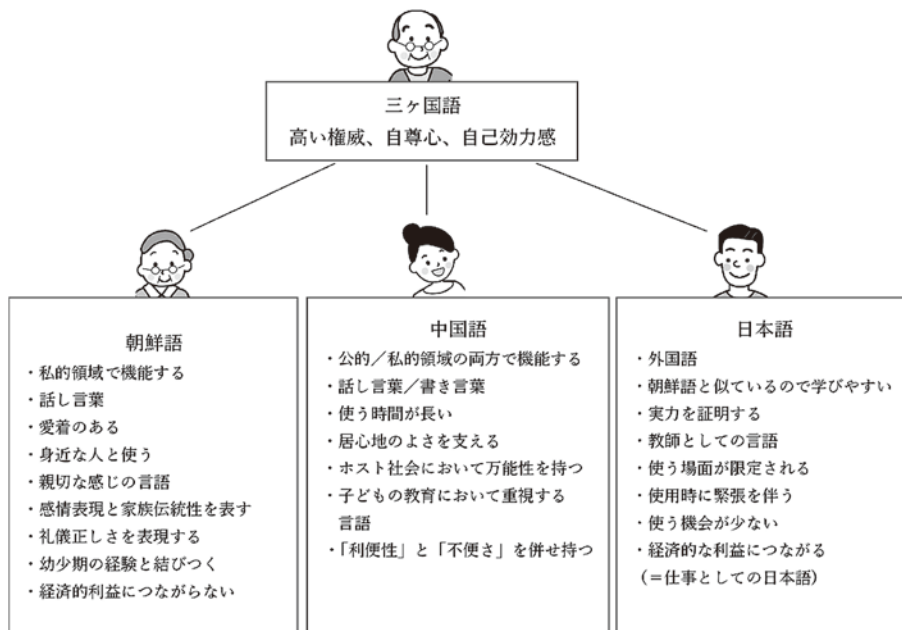


図2 チャンが捉えている言語意識および言語使用時のイメージ

VI. 考察

本稿では複言語話者チャンの言語使用と意識を当事者の視点から分析してきた。それらは、チャンの生活・生きることと深く結びついており、生活や人生の出来事に応じて変化し続けるものであった。本節では、まずチャンにおける相補性の原理について考察し、次に言語能力の再編成について述べる。

6.1 相補性の原理

チャンは彼女が置かれている様々な状況で、異なる人々と、異なる目的のために、三言語を使い分けている。それは、「日常生活の中のさまざまな場面が、さまざまな言語を必要とする」(グロジャン 2018: 30) からである。三言語話者の相補性の原理を示すために、グロジャン (2018) に倣い、いくつかの四角形によって三言語の使用領域を表示する (図 3)。

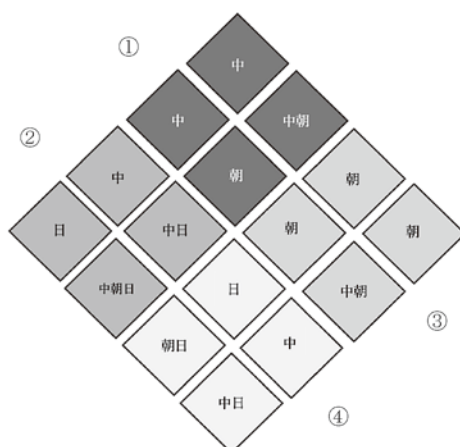


図 3 チャンの言語使用における相補性の原理の図 (グロジャン 2018 を参考に作成)

一番上の 4 つの四角形 (①) は、家庭や日常生活で使用する言語を表す。家庭内や近所づきあいでは中国語を使用している。夫との会話は主に中国語で行うが、特別な感情を表現したいときは朝鮮語を必要とする。また、姑と二人で会話する際は、朝鮮語を「敬語」として用いることで、目上の人に対する敬意を払う。

<①-日常生活>

Q: 何語で話すとき、一番楽ですか。

A: 中国語 (笑)。それは、わたしは中国語で生活してますから、やっぱり中国語を使う時間が長いん

です。特に就職してから、いや就職よりも前、大学に入ってからずっと中国語を使ってきましたから、やっぱり中国語を、こう、使ったほうが楽なんです。

<①-夫との会話>

A: 中国語で話すときもあるし、朝鮮語で話すときもあるし。だけど、(もし)旦那さんと中国語だけで話して、朝鮮語は使わないでって言われたら、それもちょっと不便(心地悪い)です。

Q: 不便ですか?

A: ある言葉は、朝鮮語で言わなきゃ…。(中略)甘えるときは、相手はどんな感覚なのかわかりませんが、私は朝鮮語を使った方が感情を表せるような気がします。

<①-姑との会話>

A: 私は姑と中国語で会話したことがないんです。

Q: ないですか。

A: はい。だから、その、ほら、朝鮮語で話しても、その、日本語のように敬語があるじゃないですか。だから、中国語で話すと不作法になるから。だから中国語を使ったことないんです。

(チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。)

次に、①の左中段の4つの四角形(②)は、仕事する場面で用いる言語を表示している。チャンが勤務する大学で、中国人の同僚には中国語で話し、日本人の同僚には日本語で話す。授業中は、学年によって使用率は異なるが、中国語と日本語を併用する。通訳の仕事をする際は、中朝・日の三ヶ国語を併用することもある。

<②-授業>

A: 授業で使う言葉ってありますよね。それは日本語の方が楽です。朝鮮語より。朝鮮語では授業できないと思います。それもしばらく練習しないと慣れないと思います。

(チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。)

さらに、①の右中段の4つの四角形(③)は、チャンが属している民族コミュニティや趣味で使用する言葉を表している。小中高の友人や先生、韓国に住んでいる親戚や友人には、基本的に朝鮮語を使用する。しかし、チャットで文字を打ち込む場面においては、朝鮮語は使用せず中国語を使用する。また、韓国ドラマを楽しむときは必ず朝鮮語を必要とする。

<③-韓国にいる友人とのチャット>

A: 私は中国人の友達が多いから、中国語で話すときが多いですね。だけど、朝鮮語（で打つのに）は慣れていないから。だから、速く打てないから、いつも打つのが遅いから、私は中国語で話しても大丈夫だから（と言われて）中国語で話します。でも相手は朝鮮語です。

（チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。）

<③-韓国ドラマの視聴>

A: ドラマを見るときも、感覚が違いますし。中国語に訳した韓国ドラマは見れないです。

Q: 朝鮮語で見たい？

A: はい。感覚が違うから。

Q: あのう、中国語に訳したドラマを見て、どんな印象を受けますか。

A: なんか、ウソっぽくて、ほら、おばさんたちがののしるのもなんか違うし、全部違う。

Q: なんとというか、リアルじゃないというか。

A: はい、そんな感じですよ。とにかく俳優たちの感情表現も違うし、全部違います。だからそんなのは、ほら、中国語では見たことがあるけど、なんか違う。

（チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。）

最後に一番下の4つの四角形(④)は、留学先である日本で使用する言葉を表している。日常生活や大学院のゼミでは日本語を使うが、大学内では日本語と中国語を併用する。宿舎では一緒に暮らしている中国人仲間と中国語で話す。本研究のインタビューにおいては、朝鮮語と日本語を併用した。

<④-日本の生活>

A: 私は〇〇会館に住んでいます。そこは全部中国の留学生なんです。だから、なんか、日本語を話す機会が少ないんです。はい、ただ、先生たちと話すだけです。

（チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。）

さまざまな言語活動領域で使用する言葉を数えると、中国語は9つ、朝鮮語は8つ、日本語は6つ、の領域で用いられていることがわかる。また、中国語と朝鮮語は各4つ、日本語は2つの領域において単独で用いられている。言語使用の基準で見れば、中国語 > 朝鮮語 > 日本語の順であり、朝鮮語より中国語が、日本語より朝鮮語が優位に見えるかもしれない。しかし、感情を表現する場面においては、中国語よりも朝鮮語が独占的に使われており、授

業で学生に文法を説明するときは、日本語の方が朝鮮語より優位である。つまり、「ある経験の領域では、ある言語が別の言語よりも好まれる（グロジャン 2018：32）」ため、言語的優位性は不変的ではなく可変的で動的である。

このように、三言語を使用領域で分類してみると、チャンの持つ複数の言語・文化についての経験と知識が、社会の様々な場面で相補的な役割を担っていることがわかる。つまり、「一人の内部に二人や三人のモノリンガルが存在して、はっきりとした部分に容易に分割できるものではなく、全体として一つのコミュニケーションを行う（グロジャン 2018：35）」ということである。

6.2 言語能力の再編成

チャンの言語はライフステージのさまざまな出来事に影響され、変化してきた。彼女は5歳まで中国語のみで育てられたが、朝鮮族学校に進学させたいという母親の意向で、朝鮮族のベビーシッターに預けられ、朝鮮語を自然習得するようになる。中国語があまり話せないベビーシッターやその孫との意思疎通を図る中でいつの間にか朝鮮語が話せるようになったという。その後、朝鮮語を使用する小学校に進学したことで朝鮮語習得が急速に進み、小中高の間は中国語に取り替わり朝鮮語が支配言語になった。しかし、大学進学を契機に中国語使用が増え、再び中国語が優勢になったという。就職してから、富山に2年半ほど留学したときは、そこで出会った韓国人の友人と朝鮮語で話す時間が多くなり、朝鮮語が優勢になっていた。中国に戻り、日常生活や職場で中国語を話す時間が圧倒的に長くなると、中国語がチャンにとって一番「楽」な言語になったという。

A: (中略) 私 2002 年に富山で二年、三年ぐらい留学したことがあります。それで、韓国人の友だちがたくさんできて、朝鮮語と日本語をたくさん使っていました。その三年間は、中国に帰ったらちょっと中国語が、なんか単語が急に思い出せなくてちょっと最初の一ヶ月か二ヶ月はちょっと困ったんです。それ、中国人の先生に、あなたが（中国語を）話すとちょっと面白いですね、留学生と話してるみたいだとか、それでなんか、何と言ったらいいか、その、主語、述語、目的語（の語順）がちょっと違うんじゃないですか。中国語は述語が前にあって、目的語がありますよね。だから、私はいつも、最初に目的語が出るんですよ。そのあとになんか述語を話しますから、中国人が聞いたらちょっとおかしい感じがします。その3年間は朝鮮語がものすごく上手になりました。これもなんか、三ヶ国語ができると言っても多分なんか程度が違うと思います。人間って同じ24時間ですから、ある言語をたくさん喋るとある言語が少し上手になるし、そういう感じでした。

(チャンのインタビューより抜粋。原文朝鮮語。日本語訳は筆者による。)

チャンを取り巻く環境の変化によって、言語に対する意識やニーズも変化し、それが言語使用にも影響を与え、言語能力を再編成している。つまり、チャンは新たな状況に直面するたびに、その状況が求めている言語を使用し、発達させてきており、今後も人生の重要な変化に応じて言語能力を再編成していくであろう。具体的には、チャンが持つ複数言語を用いて話していた「重要な他者（グロジャン 2018: 36）」の喪失（例えば、姑）によってその言語の使用が減少することや、逆に重要な他者の獲得により増加することも考えられる。いずれにせよ、図 3 の言語配置は可変的で動的なものであり、複数言語話者の言語能力を包括的に分析するためには全体論的なアプローチが必要である。

VII. まとめ

本研究は、バイリンガリズムの全体論的視点から、中国朝鮮族のチャンが持つ複数の言語が彼女の生活においてどのように機能しているかを当事者視点から明らかにした。言語使用領域や使用頻度こそ限られているが、プライドや権威を持つ三言語使用は「おじいさん」、愛着や情意的・伝統的側面を持つ朝鮮語使用は「おばあさん」という比喩で表現された。また、子どもの教育に深く関わり、利便性と実用性を兼ね備えた中国語使用は「お母さん」、仕事のための道具的側面を持つ日本語使用は「お父さん」という比喩で表現された。これらの比喩から、三言語間に役割や活力の違いはあるが、チャンの言語総体は「家族」として一体感をもって表現されており、「相補性の原理」をよく表していると言えよう。

バイリンガルの定義に統一した見解はないが、「二言語またはそれ以上の言語や方言を日常生活の中で定期的に使用すること（グロジャン 2018: 4）」のように広い定義もあれば、両言語を母語話者レベルで同等に操ることができる人（Bloomfield, 1935）のように「言語能力」に焦点を当てた狭い定義もある。今回の研究対象であるチャンは同等かつ完璧な二言語能力 = バイリンガルと認識しており、「中国語も朝鮮語も完璧でない」と自らの言語能力を過小評価していた。言語能力の観点からすれば、複数の異なる文化や言語背景を持つチャンのような複言語話者は、言語能力やアイデンティティが不完全で不安定なマージナルな存在として見られるかもしれない。しかし、複言語話者の生活・生きることと切り離さない「言語使用」の観点からチャンの三言語使用を見ると、生活のあらゆる場面において三言語が有機的に機能しており、チャンの生活を支えていることがわかる。言語の福祉的自由度（岡崎 2005a: 11）の観点から言えば、チャン自身が「社会的に実現される」と判断される実行可能な言語の機能群が実現できている状態であり、言語のあり方は良好であると言えるだろう。

前述したように、チャンは彼女を取り巻く環境の変化に応じて、言語使用と言語能力を再

編成してきた。今後、ライフステージの変化によって言語使用がどのように変化するか、追跡調査をする必要があるが、それは今後の課題としたい。

付記 本研究はJSPS 科研費 JP17K02876 の助成を受けたものです。

参考文献

- 大谷尚(2019) 『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会。
- 岡崎敏雄(2005a) 言語生態学に基づく言語政策研究—言語の生態、機能、福祉と言語政策。『筑波応用言語学研究』12, 1-14, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース。
- 岡崎敏雄(2005b) 言語生態学原論—言語生態学の理論的体系化。『共生時代を生きる日本語教育—言語学博士上野田鶴子先生古稀記念論集』凡人社。
- グロジャン・F(2018) 『バイリンガルの世界へようこそ—複数の言語を話すということ』勁草書房。
- 小泉聡子(2012) 複言語話者にとってのことばの意味—複言語主義的観点から。『言語教育研究』2, 31-41, 桜美林大学。
- 清水寿子(2007) 共生を目指す日本語教育に取り組む実習生の役割認識—比喩生成課題による検討。『人間文化創成科学論叢』10, 125-134. お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科。
- 鄭京姫(2011) 言語の境界を生きる。『リテラシーズ』9, 31-40. くろしお出版。
- 高民定・村岡英裕(2009) 日本に住む中国朝鮮族の多言語使用の管理—コードスイッチングにおける留意された逸脱の分析。『言語政策』5, 43-60. 日本語政策学会。
- 徳川宗賢(1999) ウェルフェア・リングイスティクスの出発。『社会言語科学』2(1), 89-100. 社会言語科学会。
- 朴浩烈(2013) 中国朝鮮族の言語相—延辺朝鮮族自治州延吉におけるアンケート調査から。『多摩大学研究紀要』17, 27-40。
- 本田弘之(2016) 中国朝鮮族の民族語継承と日本語教育。本田弘之・松田真希子(編)『複言語・複文化時代の日本語教育』41-62. 凡人社。
- Bloomfield, L. (1935) *Language*. New York: Holt. 三宅鴻・日野資純(訳)(1962)『言語』大修館書店。
- Giles, H., Bourhis, R., & Taylor, D. (1977) Toward a theory of language in ethnic group relations. In H. Giles (Ed.) *Language, ethnicity, and intergroup relations*. New York: Academic Press.